

幼小をつなぐ音楽活動の可能性(3)

—幼稚園・小学校での実践を教員養成に活かすために—

岡林典子
(児童学科教授)

難波正明
(教育学科教授)

深澤素子
(京都幼稚園主事)

砂崎美由紀
(附属小学校教諭)

山崎菜央
(附属小学校教諭)

高橋香佳
(京都幼稚園教諭)

大瀧周子
(京都幼稚園教諭)

1. はじめに

本研究の目的は、保育者・教員養成課程にある学生が「幼小連携」に対して意識を向け、理解を深めるために、大学の授業において幼稚園と小学校での音楽活動の実践事例を活用して学ぶことの意義を検討することである。

学校教育法第23条には幼稚園教育において「表現力の芽生えを養うこと」が挙げられ、また第30条2項には小学校教育において思考力・判断力と並んで「表現力の育成」が示され、学校教育現場において表現教育の必要性が指摘されている。教員養成機関では幼児と児童双方への知識と理解を有した質の高い表現教育の指導者の育成を目ざすことが早急な課題とされる。

上記の学校教育法のもと、平成20年に改訂された「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」では、小1プロブレムなどの問題を背景にして、幼児期の教育と児童期の教育の連続性・一貫性が確保された円滑な接続が求められ、子どもに対して体系的な教育を組織的に行うようにすることが明記された。これを受けて、近年では「子ども同士の交流」「保育者と小学校教師の交流」「幼稚園と小学校間の人事交流」「連携カリキュラムの開発」など、多様な実践的取組みが行われるようになった¹⁾。しかし一方では、幼稚園と小学校という異なる校種・学校間の文化の違いによって連携や相互理解が必ずしも深められているとはいえない現状もある²⁾。さらなる連携の充実のためには、幼保小の教員養成課程において、学生が早い段階から連携について学びの機会を得ることが重要である。長谷部

(2004)は養成校の学生の連携に関する知識・理解の不足を指摘し、「幼保小の滑らかな接続を目指した連携を担っていくためには、少なくとも連携に係る諸問題に関して、現職に就いてからの連携実践のベースとなる基礎的知識や理論を学ぶ何らかの機会を、養成課程の授業等に組み入れることの必要性³⁾」を示唆している。筆者らが行った調査においても、幼小連携に対する意識「有」との学生の回答は約30%で、意識が高いとは言い難い状況であった⁴⁾。

また、高見(2007)は学生に幼小連携を意識づけるような実践や研究が養成校においてあまり取組まれていないことを指摘し、「音楽劇づくり」を通して幼稚園教員を目指す学生たちに幼小連携の意識づけを試みている⁵⁾。

筆者らは、校種は異なるが同じ学園内で音楽教育と表現教育に携わる者として、2013年4月より幼小の円滑な接続を果たせるような、連続性・一貫性をもった音楽活動プログラムの開発を目指し連携研究に取組んできた⁶⁾。

幼稚園と小学校とをつなぐ教材の開発を目指したこれらの実践を、幼児と児童双方への知識と理解を有した表現教育の指導者育成にどのように活かすことができるだろうか。養成校の授業にこれらの実践を活用することは、学生の幼小連携に対する意識を高めたり、教材に対する理解を深めたりすることに有用であろうか。

本研究では、発達教育学部児童学科の教員免許取得に関わる演習科目において、筆者らが取組んできた円滑な接続を目指した音楽教育プログラムの実践事例を視聴することや、子どもと

同じ題材を体験することが、幼小連携に対する学生の学びや意識の向上にどのように活かされるか、その可能性を探る。

2. 研究方法

【対象】 京都女子大学発達教育学部児童学科2回生105名

【期間】 2015年5月～7月

【手順】 ①「保育内容演習（音楽表現）」（発達教育学部児童学科2回生対象）の授業において、質問紙Ⅰを用いて「取得を希望する免許の種類」「幼小連携に関するこれまでの学びの機会」「文部科学省、厚生労働省の幼小連携の取組みに関する知識」などについて尋ねる。

②筆者らが2014年度（2014年4月～12月）に準備、計画して行った京都幼稚園と附属小学校での実践VTRを視聴する。

③上記②の題材を受講生自身が体験する。

④質問紙Ⅱを用いて、「幼小連携に対する意識の変化の有無」「連携の難しさに対する捉え」などについて尋ねる。

3. 幼稚園と小学校で3種の題材を用いて行った実践について

本章では、上記②に挙げた筆者らが2014年4月から12月までの期間に、京都幼稚園と附属小学校において、ねらいを「日本語の語感とリズムを感じて、自由に声や言葉や体で表現して楽しむ」と設定して、3種の題材をもとに行った実践内容と子どもたちの様子について述べる。

3.1 絵本『だるまさん』を題材として

大型絵本『だるまさんが』（かがくいひろし／さくプロンズ新社2009）を題材として、保育と授業を行い、VTRに記録した。



【題材の選択理由】

①「どてっ」「ぶしゅー」「びろーん」など、様々なオノマトペと体の動きを連動させて、自由に表現して遊ぶことができる。②「だるま

さんが」の言葉を唱和することにより、リズムや呼吸が合うことの心地よさを体験できる。③音楽の仕組みの理解につながるリズムカルな言葉の反復や、問いと答えなどの要素が含まれている。

3.1.1 京都幼稚園での実践

【実践日時】 2014年12月9日、10日

【実践内容と子どもたちの様子】

第1日に保育者（高橋・大瀧）はオノマトペと動きを体感できるように、子どもたちをだるまさんに変身させて、絵本を読んだ。子どもたちは保育者の読みにあわせて、絵本のポーズを模倣した（写真1）。「ぶしゅーっ」というオノマトペとともに体をペタンと床につけたり、高い声から低い声へと抑揚や強弱を変化させたりしながら動きをとまって次々に絵本のページを表現していた。



【写真1】 絵本のポーズを模倣する園児

第2日は、だるまさんに変身した保育者の動き（写真2）に、子どもたちは「ふにゃふにゃ」「ぐるぐる」などのオノマトペをつけたが、次第に保育者の例示に対して動作をつけてオノマトペで表現できるようになった。さらに子どもたちは、保育者の動きから自分なりのイメージを膨らませて、声の抑揚や強弱を変化させて動作とともに豊かに表現した。また、保育者の代わりに子どもたちが動作を考え、それにオノマトペを付けて表現をするまでに発展した。



【写真2】 だるまになって動作を提示する保育者

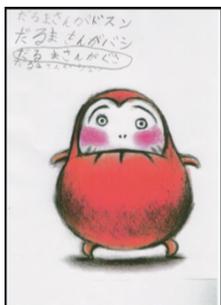
3.1.2 附属小学校での実践

【実践日時】2014年12月6日

【実践内容と子どもたちの様子】

小学校では担任教諭（砂崎）が紙を折ったり、回したりする動きをまねることから始まった。子どもたちは「ぴたっ」「くるくる」などのオノマトペを発しながら紙の動きを体で表現していた。絵本が始まると、自発的に立ち上がりだるまの動きを体全体で模倣していた。

その後、グループに分かれて「だるまさんが」に続く様々なオノマトペを考え、記録用紙として担任教諭が用意しただるまの絵の空白部分に文字で書き込んだ。（写真3）そして、グループで考えたオノマトペと動きを発表し、全員で表現を共有した（写真4）。



【写真3】考えたオノマトペが記入された用紙



【写真4】「ぐきっ」のオノマトペを表現する1年生

3.2 遊び歌《しゅりけんにんじゃ》を題材として

2つめの題材である《しゅりけんにんじゃ》は、両手の人差し指を立てて重ね、「にんじゃってなんじゃもんじゃ」と繰り返して唱えた後に、保育者が子どもたちの足や頭に向かって手裏剣を飛ばす遊び歌である。手裏剣をかわすために、「足しゅりけん」では跳びあがり、「頭しゅりけん」では屈み、「ハリケーン」では両手で手裏剣を挟むなど、即座に動作で反応するところが面白い遊びである（譜例1）。

【譜例1】《しゅりけんにんじゃ》

【楽譜作成：南 夏世】

3.2.1 京都幼稚園での実践

【実践日時】2014年4月11日、18日

【実践内容と子どもたちの様子】

子どもから「《にんじゃ》やりたい」とリクエストの声が上がり、《しゅりけんにんじゃ》を行うことになった。みんなで《しゅりけんにんじゃ》を遊んだ後（写真5）、約30分程度の描画活動が行われた。



【写真5】保育者の投げる手裏剣を受け止める園児

描画活動の後、数人の子どもから自発的に《しゅりけんにんじゃ》遊びが始まった。男児AとBが「にんじゃって、なんじゃもんじゃ…」と唱えながら、遊び始める。Bが手裏剣を投げる動作をすると、Aは跳んだり屈んだりして反応をする。そこに女児Cが加わり、3人で「お尻しゅりけん」、「お腹しゅりけん」「背中しゅりけん」など、さかんに言葉を入れ替えて様々な手裏剣を投げ合う。

次に男児Dが加わり、さらに女児Eが参加して5人になると、子どもたちは輪になって「セーノ」と声をかけ合い、顔を見合わせ、互

いの様子に気を配りながらタイミングを合わせて唱え始めた(写真6)。5人の声と動作はピタリと同期する。さらに人数が増えて7人になると、「しゅりけんシュシュシュ」とリズムカルに繰り返される声が次第に高まり遊びが盛り上がった。



【写真6】輪になって遊ぶ園児

3.2.2 附属小学校での実践

【実践日時】2014年5月10日, 13日, 17日

【実践内容と子どもたちの様子】

幼稚園児の育ちを小学校の子どもたちにつなぐことを見据え、筆者らは小学校の担任教諭(砂崎・山崎)と話し合い、①拍の流れにのって言葉を唱えながら体を動かす、②グループでコミュニケーションをとりながら声と動作を合わせる、③グループごとに遊び方を工夫し、動作を考えて発表する、などのねらいを設定し、《しゅりけんにんじゃ》を題材として指導計画(全3時間)を立て、授業実践を行った。

第1時では担任教諭から遊びの説明を聞き(写真7)、子どもたちは《しゅりけんにんじゃ》を遊び込んだ。回が進むに従って、次第に安定



【写真7】遊び方の説明を聞く1年生

した拍の流れにのって言葉と動きを同期できるようになっていった。

第2時ではグループでの話し合いの中で、他者と声や動作を合わせることの面白さ・心地よさを感じて、互いにコミュニケーションを深め合った。

第3時では、表現したい手裏剣のイメージに

沿って、新たな動作が考えられた。

子どもたちが考えた手裏剣は、「スカーフしゅりけん」など制服に関連するものや、「脳しゅりけん」「目しゅりけん」など体に関するもの、その他に「骸骨しゅりけん」や「天使しゅりけん」などユニークな創造性が発揮されていた。

3.3 わらべうた《らかんさん》を題材として

3つめの題材《らかんさん》は、円陣をつくった子どもたちが「よいやさ」の囃子言葉に合わせて一人ひとり考えた面白い表情やしぐさをしてそれを隣の子が一動作遅れでまねしていく、いわゆる「羅漢まわし」という遊びである(譜例2)。

【譜例2】《らかんさん》



【楽譜作成：難波正明】

3.3.1 京都幼稚園での実践

【実践日時】2014年7月3日, 11日

【実践内容と子どもたちの様子】

第1回は保育者(高橋・大瀧)が子どもとともに円陣なって座り遊び方を説明した。子どもたちは保育者の歌と動作をまねて、「ヨイヤサ」の部分にポーズをつける遊び方を習得していった。そして、「ヨイヤサ」のかけ声に自分なりの面白い動作をつけて表現できるようになった。



【写真8】保育者の動作をまねる

第2回は、4～5人のグループに分かれて遊

んだ。全員で遊ぶのとは違って、子どもたちは身近に他者の存在を感じてコミュニケーションをとることができ、笑顔で動作を回していた。また、スムーズに回らない場面では互いに指示



【写真9】グループで遊ぶ園児

を出し合い、子ども同士での工夫が見られた。

3.3.2 附属小学校での実践

【実践日時】2014年7月8日, 12日, 15日

【実践内容と子どもたちの様子】

園児たちの表現力の育ちを小学校につなぐことを見据え、筆者らは小学校の担任教諭(砂崎・山崎)と話し合い、《らかんさん》を題材とした指導計画(全3時間)を立て、実践を行った。

第1時では担任教諭が五百羅漢の石像の一部をスライドで提示し、《らかんさん》の遊びの説明を行った。児童らは担任教諭の歌と動作をまねて遊びを習得し、4人、7人と人数を増やして、最後は12人でスムーズに動作を回すことができた(写真10)。拍にのって動作を回すことは、幼稚園年長児よりも小学1年生の方がよ



【写真10】7名で動作を回す1年生

りスムーズであった点に、音楽的な発達を読み取れた。

第2時は、4人のグループに分かれて動作を考えた。各グループには、面白い動作やテンポを遅くするなどの工夫がみられた。

第3時は、音楽室に移動して全員が円陣になった。授業が始まる前から、ポーズを考える児童や歌をとなえる児童が見られ、子どもたちの表現意欲の高まりが感じられた。

4. 大学で行った3種の題材を用いた演習

本章では、前章で述べた幼稚園と小学校での実践のVTRを視聴した後に、同じ3種の題材を学生自身が体験した「保育内容演習(音楽表現)」の授業について述べる。

4.1 絵本『だるまさん』を題材とした演習

授業では実践VTRを学生に提示する前にテキスト⁷⁾を用いて、オノマトペの規則性や動きとオノマトペとの関連について学びを深めた。また、この題材での幼稚園の実践を小学校へつなげるために筆者らが全員で話し合ったことについて説明した。それからVTRを提示し、学生たちは「どてっ」「ぶしゅー」などのオノマトペが持つ力動感を感じながら動く子どもの様子に注目した。

続いて同じ題材『だるまさんが』を声に出して読みながら動いた。さらに、6~7人のグループに分かれて絵本には挙がっていないオノマトペと動きを考えて発表した(写真11)。

また授業で気づいたことや感じたことを学習シートに記述した。



【写真11】だるまさんのグループ発表を行う

【表1】授業に対する学生の感想や気づき①

保育者のオノマトペの言い方が重要だと学んだ。
ビデオからは、子どものオノマトペのつぶやきを拾って、広げていくことが大切だと思った。
子どもたちがだるまさんの真似をしながら生き生きとした楽しそうな表情をしているのを見て、オノマトペは耳で聞いて、体で感じて楽しめるものだと思った。
ビデオを見てから、自分でもオノマトペと動きを使って活動してみると、声と言葉の連動が面白いと感じた。
小学校の担任が紙の動きを導入に使っていたのを見て、子どもたちに視覚的に分かりやすいものを用いることの利点が理解できた。

表1にみられるように、学生からは授業後に、

オノマトペと動きの連動に面白さを感じたこと、幼稚園と小学校教諭の指導の工夫や役割の大切さを理解したことなどが挙げられた。実践VTRの視聴は、発達に沿った幼稚園・小学校教諭の授業への工夫に対する気づきを学生にもたらしただことが分かる。

4.2 《しゅりけんになんじゃ》を題材とした演習



【写真12】手裏剣の発表を行う

授業ではVTRを提示する前に、子どもたちから《しゅりけんになんじゃ》をしたいという

強い要望があったことや、自然発生的に遊びが始まった経緯を説明した。さらに園児の遊びを小学校の音楽科の授業へつなげるために筆者らが全員で話し合い、全3時間の指導計画を立てたことを伝えた。

VTRの視聴では、子どもたちが様々な手裏剣を考え出して投げ合う姿や、遊び仲間が2人から次第に増えていく過程及び遊び方の変化に注目した。次に同じ題材《しゅりけんになんじゃ》を全員で行った。続いて7～8人のグループに分かれて新たな手裏剣の動きとオノマトペを考えて発表をした(写真12)。また授業から気づいたことや感想を尋ねた。

【表2】授業に対する学生の感想や気づき②

子どもたちが遊ぶのを見て、新しい手裏剣を考える子どもの発想の豊かさを興味深く感じた。
ビデオから子どもたちが遊ぶ姿と自分たちを比べて、子どもたちの方が考える際に体を動かしていると感じた。
小学校の実践ビデオを見て、グループ活動にも応用できることを学んだ。
保育者や教師がオノマトペの強弱、大小などを工夫していくことで子どもの反応も大きく変わってくるのが理解できた。
オノマトペによって、動きの面白さや印象が変わることに気づいた。

どうしたらさらに楽しくなるかと考えることが大切だと学んだ。手裏剣のアイデアが面白くても、控えめな表現であると面白さが減ってしまうので、先生役の人が大きな動きでやると子どもも楽しくできると思った。

《しゅりけんになんじゃ》をやってみて、始めるタイミングがとても重要だということを学んだ。手裏剣を投げるタイミングが早すぎると体が追いつかないし、遅すぎると焦れてしまう。

他のグループの発表を見て、動きにどのようなオノマトペを付けるかが重要だとわかった。

『だるまさん』のときよりも、音と言葉と動きが一致したものになってきていると思った。

表2にみられるように、授業後には学生から、幼児と児童の遊びにみられる表現の特徴に気づいたことや、題材に対する教師の工夫を理解したことなどが挙げられた。ここでも実践VTRの視聴は、学生に幼児と児童の双方への表現教育に関する知識と理解をもたらしていることが分かる。

4.3 《らかんさん》を題材とした演習



【写真13】《らかんさん》で遊ぶ

授業では実践VTRを学生に提示する前にテキスト⁸⁾や資料を用いて、言葉に自然な抑

揚やリズムが生じ、歌うように唱えられることがわらべうたのはじまりであることを説明した。また、2音歌、3音歌、4音歌などにみられるわらべうた旋律の成り立ちについても解説した。さらに、わらべうたは「音楽教育の出発点となる」「伝承的な遊びを獲得し、集団で遊ぶ楽しさを知る機会となる」「創造力や表現力を伸ばさせる機会となる」など、わらべうた遊びの意義についても話した。加えて、小学校音楽科の教科書にいくつかのわらべうたが掲載されていることや、園児の遊びを小学校の音楽科の授業へつなげるために筆者らが全員で話し合い、全3時間の指導計画を立てたことを伝えた。

VTRの視聴では、発達に沿ってみられる園児と小学1年生の表現の違いに注目した。次に受講生全員で円陣になり、同じ題材《らかんさん》で遊んだ(写真13)。その後、授業から気づいたことや感想を尋ねた。

【表3】授業に対する学生の感想や気づき③

VTRを見て、年長児と小学1年生では、できることとできないことに差があることに気づいた。
幼稚園では途切れたり、他の子と同じ動作になってしまうことがあったが、ポーズは個性的だったように思う。小学生になると動作を工夫したり、スムーズに動作を回せていた。
学びとる速さや表現力が違うことが分かった。2つの動きを考える時に、1年生の方がヴァリエーションが豊富であると感じた。
実際にやってみて、子どもたちの遊んでいるときの気持ちを感じることができた。同じ動きをみんなでするだけで楽しかった。
実際に自分がしてみると、みんなが自分の考えたポーズをしてくれることが嬉しかったし、楽しかった。所属感が得られた。
動作が続いていくのがとても気持ちよかった。
友達と同じリズムを同じ輪の中で楽しむことで一体感が得られると感じた。
自分の考えたポーズをみんなが真似してくれて、心が温かくなった。こういう遊びを通して友だちの優しさや温かさ、大切さを感じることが出来るのではないかと思った。
自分の番になった時に戸惑って間が空いたりするが、その際に先生が声でサポートしてあげることが大切だと思った。
拍の流れについて行けずに止まってしまう子がいっても、先生がすかさず手拍子をしたり、周りの子が体をゆずって待っていたりして、良い雰囲気の中で行うことが楽しさを増すと思った。
ピアノがなくてもわらべうたは遊べるのが分かった。

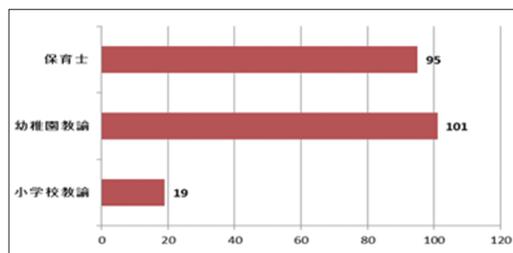
表3にみられるように、VTRの視聴を通して学生たちはわらべうた《らかんさん》を題材にした保育と授業の共通点と相違点を捉え、遊びを通して子どもに何が育まれていくのかを考えている。また、体験を通して、身を持ってわらべうたの楽しさを感じ、ピアノがなくても遊べるなど、題材に対する理解が深められた。

5. 総合的考察—質問紙調査をもとにして—

前章では、演習における幼小の実践VTRの視聴と3種の題材を体験することから、学生にどのような学びが得られたのかを述べた。本章では、授業の前後に2回行った幼小連携に関する質問紙調査をもとにして、実践事例の視聴と題材の体験が学生の意識にどのような変化をもたらしたのかを検証する。

5.1 授業前に行った質問紙調査から

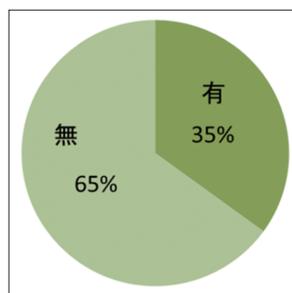
授業前に行った1回目の質問紙では、初めに学生が取得を希望する免許について尋ねた。図1は児童学科2回生105名が前期の時点で取得を希望している免許の種類である。



【図1】児童学科2回生が取得を希望する免許の種類

9割以上に及ぶ大多数の学生が保育士と幼稚園教諭の免許取得を希望している。また小学校教諭の免許を希望する学生は19名で全体の約2割弱である。

次にこれまでに幼小連携について意識を向けたことがあるかどうか、またいつ頃どのような内容について考えたかを尋ねた。これまでに連携について意識を向けたことが有ると回答した学生は、37名で全体の35%であった(図2)。



【図2】連携に対する意識の有無

また、そのうちの10名が高校時代に「小1プロブレム」「幼稚園と小学校のつながり」「幼稚園の就職に際して幼小の免許があるとよいか」などについて考えた

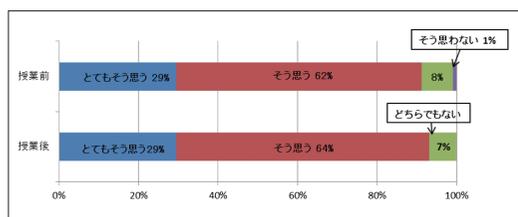
回答した。さらに19名が大学入学後に、「小1プロブレム」「現在行われている取組み」「教員同士の交流」「連携の必要性」「保育や授業の内容のつながり」「就職に際し必要となる免許」などについて考えたと回答した。大学に入ると授業から知識や情報が得られるため、より具体的な点に考えが及んでいるといえる。

次に幼小の学びの連続性についてどのような授業で学ぶ機会を得たかを尋ねた。主に「保育原理」「教育原論」「児童学入門演習」「教育心理学Ⅱ」「体育科教育方法論」などが挙げられ、学生は複数の科目から学びの機会を得ていることが示唆された。また、文部科学省や厚生労働省による幼小接続に関する取組みについては、58%に当たる61名が「知っている」と回答しており、連携に意識的ではない学生も取組みについての知識を得ていることが捉えられた。

5.2 授業前と授業後の意識調査の比較から

連携に関する早期の知識獲得について、授業の前後に「学生時代に幼稚園教育と小学校教育の接続について知識を得て、考えることが必要である」と思うかどうかを尋ねた。

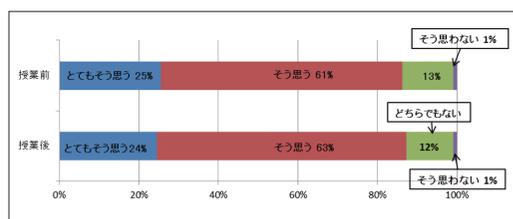
問いに対する肯定的な回答は、授業前では「とてもそう思う29%」「そう思う62%」を合わせると91%でかなり高い値であった。授業後は「とてもそう思う29%」「そう思う64%」を合わせると93%で、若干の増加があったものの大きな差は認められず(図3)、学生が常に知識獲得の必要性を意識していることが捉えられた。



【図3】 学生時代における知識獲得の必要性

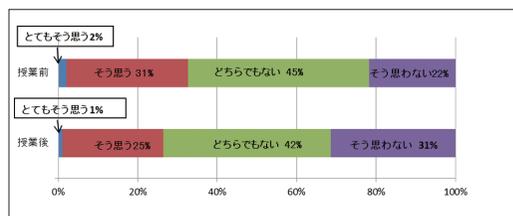
また「幼稚園(保育所を含む)と小学校の交流は必要である」と思うかどうかを問うと、先と同様に授業後に若干の増加がみられたものの

大きな差は認められず(図4)、学生が幼小の交流に高い意識を有していることが示唆された。



【図4】 幼稚園と小学校の交流の必要性に関する考え

次に、指導法と教育内容に関して「幼稚園と小学校の教育内容や指導方法は異なるので、連携することは難しい」と思うかどうかを尋ねた。



【図5】 連携の難しさに対する考え

この質問に対する回答では、図5より授業前には「とてもそう思う2%」「そう思う31%」を合わせて33%の学生が難しさを感じていることが読みとれる。そして、授業後には「とてもそう思う1%」「そう思う25%」を合わせて26%となり、連携の難しさを感じる割合に7%の減少が認められた。また、連携することを難しいと思わないという回答は、授業前の22%から授業後には31%へと増加した。これらの変化を総括的にみると授業後には連携を難しいと感じる学生の割合が減少したことが捉えられる。

表4は授業前に連携を難しいと捉えていた学生が、授業後にその捉えに変化が生じた理由をまとめたものである。ここには実践事例を視聴することによって連携の一つのあり方を具体的に捉えることができ、連携が難しいものではなく身近に感じられるようになったことが窺える。一方、授業後も連携することを難しいと捉えている学生もみられた。表5にその理由をまと

〔表4〕 授業後に変化が生じた理由

連携は難しいものだと思っていたが、子どもたちの発達に合った形で行おうと思った時、幼稚園教育も小学校教育も大きな違いはないのだと分かったから
難しいと思っていたが、授業を通して幼稚園児には難しいだろうと思っていたことが普通にできていたり、小学生には簡単すぎるだろうと思っていたことを楽しんでいる姿を確認できたから
指導方法が異なるから難しいとは思いますが、共通点などを見つければ連携することは可能だと思うから
幼稚園でできることを確認し、小学校に活かすことが実際に出来ていることをVTRにより理解したから
難しい点はあると思うが、同じ題材を通して繋がりが見えたから

〔表5〕 連携を難しいと思う理由

年齢が違うので異なる点を明確にしておかなければ連携の意味がなくなると思うので、少し難しいと思う
以前から連携は必要だと考えていたが、思ったより大変なことかもしれないと思ったから
子どもの理解力が異なるので
年齢に応じてできることや分かることが違うから

めた。

表5からは、授業後も連携を難しいと捉えている学生が、幼小の年齢差による理解力やできることの「違い」などに難しさを感じていることが窺える。一方、難しいと捉えていたが授業後にその捉えが変化した学生は、幼小両者の相違点を捉えながらも、「発達に合った形で行う」「共通点を見出す」「繋がりを見出す」など具体的な対応を考えて連携を理解している点に違いがみられた。

5.3 実践VTRの視聴と題材の体験を通して幼小連携に対する意識に変化はみられたか

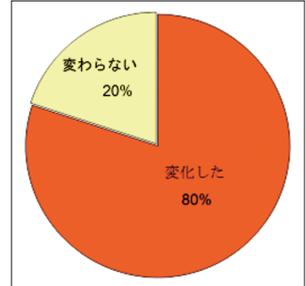
筆者らが取り組んできた円滑な接続を目指した音楽教育プログラムの実践事例を紹介し、子どもと同じ題材を体験することを試みた授業を通して、幼小連携に対する学生の意識には、どの

ような変化がみられただろうか。

図6は学生の意識の変化について授業後に尋ねた結果である。

80%の学生に意識の変化が認められた。

また以下の表6は意識に変化が生じた理由をまとめたものである。



〔図6〕 授業後の意識の変化

〔表6〕 授業後に意識が変化した理由

以前は小学校教育と幼稚園教育の接続について、それほど重要だとは感じていなかった。しかし、授業を受けてみて、双方の指導方法の違いを知り、接続や連携が必要であるという考えが変わった。
今までは幼小連携についてあまり考えたことがなかったが、授業内容やアンケートなどを通して意識するようになった。また興味がわいてきて、調べてみたいと思うようになった。
幼稚園教育と小学校教育の繋がりのイメージを前よりも持つことができたように思う。また、共通している部分もたくさんあるので、良いところを伸ばしていく関わり方をしてくべきだと思った。
実際の幼稚園と小学校の様子を見て、具体的なイメージが持つことができたし、違いも理解することができた。その上で交流は大切だと思った。
これまで接続が大切だと聞いてはいたが、具体的にどうすればよいかは知らず、授業でこういう接続の仕方があるのだと知り、新鮮で驚いた。
音楽を通した接続への意識が高まった。
幼小連携や接続と言われても今まではあまりはっきりとその重要さやなぜ考えるべきかなどが分からなかった。しかし、授業を受けて実際にグループで体験し、ビデオを見ることで同じ題材が繋がることが理解できた。
園児と小学生は全然違うと思っていたが、VTRをみて発達段階をふまれば同じ内容でもそれぞれに十分に楽しめることが分かり、以前よりも強く幼小の接続を考えるようになった

表6からは、授業によって具体的なイメージや方法がつかめたことや、題材に繋がりを見出すことができたことによって、意識の変化がもたらされ、連携に対する理解が深められたことが見て取れる。

一方、意識の変化はなかったとの回答では、「以前から接続については必要だと考えているので、それは変わらない」という理由が多くみられ、連携への高い意識を有する学生の存在も示唆された。

おわりに

本稿では大学の演習科目において、筆者らが取組んできた円滑な接続を目指した音楽教育プログラムの実践事例を視聴することや、子どもと同じ題材を体験することが、幼小連携に対する学生の学びや意識の向上にどのように活かされるかを検討してきた。その結果、実践事例の活用や同じ題材の体験が学生に意識の変化をもたらした点に、本研究の意義が見出せる。今後は一回切りではなく繰り返し学生に幼小連携の意識を定着させていくことが課題である。

幼稚園と小学校をつなぐ筆者らの連携の試みは、幼児期から児童期の子どもの発達を連続したものと捉えて、言葉や体の感覚的・音声的側面を育み、表現力を伸ばすことを主眼としている。学習が進むにつれて、子どもたちは言葉という概念でものごとを捉えてしまいがちであるが、学年が上がっても日本語の豊かな表現の世界を感覚的に捉えて、タイミングよく声を出したり動いたりできる力を継続して伸ばしていけるような系統的な音楽教育・表現教育のプログラムを開発していきたいと考えている。

これからも大学教育と幼稚園、小学校教育の双方の質の向上を図ることを目的として幼小連携の研究に取り組んでいきたい。

※本研究は、JSPS（課題番号：25381279 代表者：岡林典子「幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発」）、及び京都女子大学平成27年度研究経費助成を受けている。

注

- 1) ①網野武博・増田まゆみ・秋田喜代美・尾木まり・高辻千恵・一前春子「保育所・幼稚園・小学校の連携等に関する現状分析及び今後の展望に関する研究Ⅱ」東京家政大学生生活科学研究報告第34集, 1-14頁, 2011, ②神戸大学付属幼稚園「幼小をつなぐ幼児期のカリキュラム『神戸大学附属幼稚園プラン』の創造～1の方向・40の道筋で幼児教育を可視化する～」幼稚園研究紀要36, 2012, ③小玉亮子ほか「幼小接続期の実践と課題—お茶の水女子大学附属幼稚園・附属小学校の試み—」日本保育学会第66回大会要旨集 p. 134, 2013
- 2) ①前掲書1の①と②, 廣嶋龍太郎「幼小連携教育の実際と問題点」実践女子大学 生活文化フォーラム No. 15, 144-151頁, 2011
- 3) 長谷部比呂美「保育者を目指す学生の幼保小連携に関する意識：『小1プロブレム』の背景要因についての自由記述から」お茶の水女子大学発達教育センター紀要1, 43-52頁, 2004
- 4) 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・南夏世「幼小連携に対する学生の理解—表現活動の実践に基づく演習をめぐって—」全国保育士養成協議会 第54回研究大会研究発表論文集 p. 320, 2015
- 5) 高見仁志「幼稚園教員養成段階の学生に対する「幼・小連携」の意識づけ：湊川短期大学専攻科の「音楽劇づくり」に関する授業より」湊川短期大学紀要43, 39-45頁, 2007
- 6) ①岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明「幼小をつなぐ音楽活動の可能性—京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて—」, 京都女子大学発達教育学部紀要第10号, 77-86頁, 2014, ②難波正明・岡林典子・深澤素子・砂崎美由紀・山崎菜央・高橋香佳・大瀧周子「幼小をつなぐ音楽活動の可能性(2)—わらべうた《らんさん》の実践から」, 京都女子大学発達教育学部紀要第11号, 11-20頁, 2015, ③岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南夏世「幼小の子どもの育ちをつなぐ音楽活動の試み—遊び歌《しゅりけんにんじゃ》の実践をもとに—」, 関西楽理研究 XXXⅡ, 41-52頁, 2015, ④岡林典子, 佐野仁美「オノマトベと動きによる表現活動に関する考察—絵本を用いた実践をもとに—」, 学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要20, 2016発行予定(印刷中)
- 7) 山野てるひ・岡林典子・鷹木朗編著『感性をひらいて保育力アップ! 「表現」エクササイズ&なるほど基礎知識』明治図書, 82-83頁, 2013
- 8) 前掲書 p. 106